

初めてのクリスマス風景 ～二人の男の光と影～

ルカ 2：1－7

1 そのころ、**皇帝アウグストゥス**から全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。2 これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。3 人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。

4 **ヨセフ**もダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。5 身ごもっていた、いいなずけの MARIA と一緒に登録するためである。6 ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、7 初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

今日読んだ聖書の箇所は、世界で最初のクリスマス、つまりクリスマスの主人公であるイエス・キリストがお生まれになったいきさつが書かれてあります。この記事にはイエスの誕生をめぐる二人の男性が登場します。

最初に登場するのは、**ローマ皇帝アウグストゥス**（前 63～後 14 年、左図）という人です。



「アウグストゥス」というのは称号で、本名はオクタ비아ヌスと言います。英語でジュリアス・シーザーという名前の方が知られているかもしれません。皆さんの中でクレオパトラという名を聞かれたことがある方もいるでしょう。パスカルが「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら世界の歴史は変わっていた」といった、美貌と才知で知られるエジプト最後の女王です。このクレオパトラを屈服させ、約三千年という長いエジプト王国の歴史に終止符を打ち、征服したのがこのオクタ비아ヌスです。オクタ비아ヌスは、地中海を囲むヨーロッパ、アフリカ、そしてアジア

地域を平定し、いわゆる「ローマの平和」の立役者でした。そこでローマの元老院は、オクタ비아ヌスに敬意を表し、「アウグストゥス」という称号を与えます。「偉大な者、崇拜されるべき者」といった意味で、これにより彼は第一代のローマ皇帝になりました。イエス・キリストが生まれたのはまさにこの時代でした。

この皇帝から住民登録の勅令が出ます。アウグストゥスはしばしば人口調査をやらせたようです。その理由は、徴兵や賦役のためでした。無限に長い国境線を守り、あちこちで起こる暴動を押さえるために、皇帝は沢山の兵士を必要としました。また、暴動が起きた時には直ちに駆けつけるために道路や駐屯地、軍事基地の充実は欠かせず、土木事業のために多くの人と税金が集められました。

2 節に「人々は皆、登録をするために各々自分の町へ旅立った」とあります。今年、国勢調査がありインターネットでも受け付けていました。当時は、自分の町、つまり本籍地、出

身地に帰って登録することが義務づけられました。交通機関といっても、当時の庶民にはロバか徒歩しかありません。それぞれの仕事を放り出して、家を空けて旅につかねばなりません。しかも、それは皇帝から税金を取られ、自分の息子を皇帝の軍に取られるための登録なのです。人々はこれを知っていたので、調査のたびにパレスチナのあちこちで暴動が起きました（使徒 5:37）。

第二の登場人物はヨセフです。福音書記者のルカは、人口登録に足を運ぶ無数の人々の中



からヨセフという男に光をあてます。彼の住まいはパレスチナのナザレと言う所でしたが、登録のために本籍地のベツレヘムまで、直線で約150 kmの旅をしています。ナザレとベツレヘムの間には起伏に富むサマリア山地がありました。またこの住民サマリア人とユダヤ人とは関係が悪く、迂回するのが常でした。そこで実際はその倍ほどの距離を歩くことになります。恐らく一週間近くかかったでしょう。

悪いことは重なるものです。婚約者マリアが妊娠をしており、身重になっています。彼等二人にとって災難としか言いようのない人口登録でした。そして、たどり着いたベツレヘムでイエス・キリストが生まれます。記者ルカは、イエスが宿屋ではなくて、飼い葉桶に生まれたと記してい

ます。「飼い葉桶」とは、石で出来た、牛や馬の飼料入れで、生まれたばかりの赤ちゃんを入れるのには丁度良い大きさです。なぜ、飼い葉桶に寝かされたのかというと、「宿屋には彼等の泊まる場所がなかったから」とあります。出産間近の女性が宿に泊まることは出来なかったのです。これが今、世界の人々が祝っているクリスマスの最初の光景です。

ここに登場する二人の人物、皇帝アウグストゥとヨセフとは対照的です。まるで光と陰のような人です。かたやローマ皇帝で、私たちはこの人について多くの記録をもっています。アウグストゥスは、力と栄光を一身に集めた人で、彼の周りには人々の憧れがあり、称賛があります。華やかさ、威厳、豊かさと富が彼の周りには満ちあふれています。彼はその名前の通り、人々から崇められ、全てを思いのままに支配する尊厳をもっておりました。



ス
二
こ
ト
に
と
ま

かたや、誰からも顧みられない貧しいヨセフという人がいます。私たちはこの人について福音書以外に記録を持たない無名の人物です。この人の周りには重苦しさがあります。ヨセフからは、重い足音が聞こえます。ベツレヘムの町で泊まる場所を探し回るヨセフの引きずるような疲れた足音です。また彼の傍らには、唇をかみしめ陣痛をこら



えるマリアのうめき声が聞こえてきます。ヨセフの耳には、ガリラヤで起こった暴動と、皇帝がそれを残虐に鎮圧したという噂を語る人々の低い声が聞こえています。二人がようやく軒を借りた馬小屋には、やせ細って臭いロバや牛の匂い、尻尾で蠅を追い払う音、そして藁（わら）にまみれ、寒さに小さな腕を縮めている赤子の寝息が聞こえます。この様にヨセフの周りには、何の華やかさも、美しさも、心を浮き立たせるものもありません。皇帝の言葉に従う他ない無力で、惨めな、貧しい男の姿です。許嫁（いいなずけ）と小さな赤子のために、精魂を使い果たし、疲れはてて泥のように眠っている男の姿がここに 있습니다。

しかし聖書は伝えています。今日私たちが祝っているクリスマスの主人公であるイエス・キリストは、このヨセフの傍らにおられたということです。神の子は、皇帝アウグストゥスの子として生まれたのではなく、惨めなヨセフの子として生まれたのです。支配する者の子ではなく、支配される者の子として、富める者の子としてではなく、貧しい者の子として、勢力に満ちあふれた人の子ではなく、疲れはてた者の子として、生まれたのです。

この出来事を読んで私が感じるのは、私たちがクリスマスの意味、あるいはイエス・キリスト誕生のリアリティに迫ろうと思うならば、ヨセフの様な人々に心を寄せるべきだということです。なぜならクリスマスの主人公は、そこにおられるからです。

このクリスマスの時に、パタヤの孤児院の子ども達の傍らに、キリストは今もおられ、寄り添っています。またフィリピンの不法居住地の貧しい子供達のそばに、心をくわいている人々がいます。小さくされた人々に手を差し伸べ人、支え続ける人がいます。貧しくてツ



リーもないし、ケーキもプレゼントもないかもしれません。でもそこに神の子イエス・キリストはおり、そこにこそクリスマスの出来事が今も起きているのです。私たちの身の回りの仲間にも、魂が乾き、心がかじかんでいる人がいるかもしれません。私たちがその人たちのことを心に覚え、思いやりをもって声をかけるなら、そこにもクリスマスの出来事が起きるのです。

現在のベツレヘムですが、ヨセフが泊まった馬小屋の跡に建てられたとされる「聖誕教会」があります。パレスチナでは最も古い教会の一つで、大きな石づくりの要害のような教会です。毎年クリスマス・イブには、そこから世界中に向けてミサが中継されます。ところが大きい教会には不釣り合いほど、とても小さな入り口です。腰をかかめないと入れないくらいです。小さいのは歴史的に経緯がありますが、ガイドさんは次のように説明していました。「キリストの降誕にたちあおうとする者は、身分の高い者であれ富める者であれ、へりくだらなければならない」と。実際、腰をかかめ、頭を低くして通る時に、自分の足下が見えます。どんなに着飾っても足下は埃にまみれています。その様に私たち自身もまた神の前に貧しい者であることを知ることによって、私たちも神の子に出会うことができます。



*大学のスミス・ミッションセンターでは、フィリピンの貧しい子どもの就学支援のために献金を募っています。A館入り口守衛室の横に専用の献金箱を設置しています。皆さんも苦勞されていると思いますが、フィリピンの子ども達ももっと困難な状況にあります。このクリスマスの出来事を記念して、子ども達にクリスマスの喜びをお裾分けできたら幸いです。ご協力をお願いします。

